

# 岡山県真庭郡久世町における白小豆の取組み

岡山県真庭農業改良普及センター

主査 平井和樹

## 1. 地域の概要

真庭郡久世町は岡山県の中北部に位置し、年平均気温13℃、年降水量1,499mmであり、周囲を中国山地の連なる標高600～900mの山に囲まれた地域で、町内を流れる旭川とその支流沿いに標高150～300mの狭小な平地が点在しています。

平坦地では、宅地造成による混住化が進行しており、岡山自動車道の開通など道路

交通網も整備され、県北流通センターが整備されるなど、県北地域の交通拠点としての期待が高まっています。総人口は約1万2千人、総農家数869戸のうち販売農家は583戸、販売農家の8割が第2種兼業農家で、兼業化と高齢化が進行しています。

主要作物は水稻を中心に、梨、ナス、ホウレンソウ等が栽培され、特産物として白小豆、ミツマタ、茶があります。

## 地図 岡山県における久世町の位置

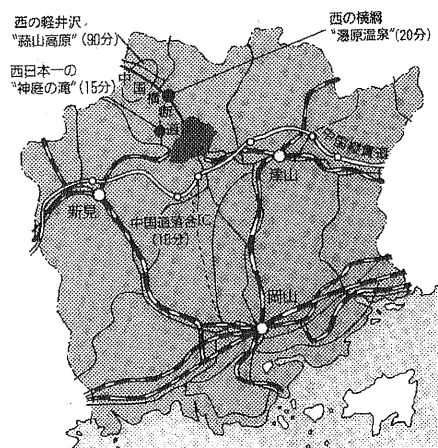


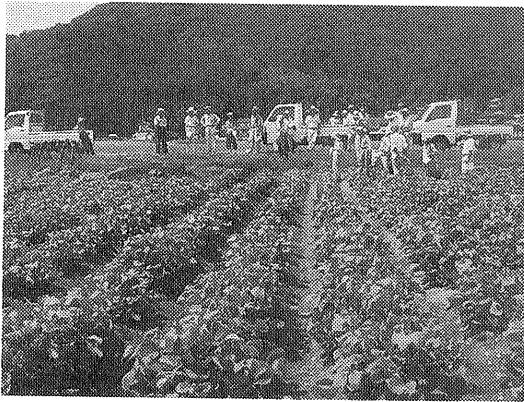
表1 久世町の農産物（平成13年）

品目	作付面積
水稻	245ha
大豆	19ha
小豆	33ha
ダイコン	7ha
キャベツ	5ha
ナス	5ha
ホウレンソウ	3ha
梨	4ha
菊	1ha
飼肥料作物	69ha
工芸作物	40ha
乳用牛	161頭
肉用牛	47頭

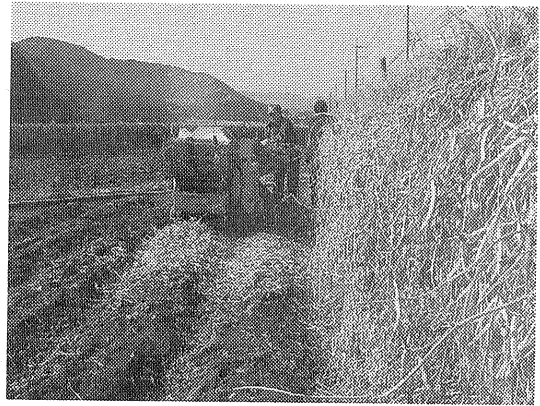
## 2. 取り組みの経過

久世町の白小豆については、「農業技術

体系」の中でも1975年の記事が紹介されており、1971年には転作作物として栽培され



炎天下のほ場巡回講習会



脱粒機による脱穀作業

ていたようです。そのころ小豆を導入した理由は、労力配分の都合と特別の施設や機械がいらなかったこと、この地方で生産されたものは品質が良いことで知られ、比較的高値で取り引きされていたことです。また、白小豆は赤小豆より値段が高く、当時の赤小豆の代表品種であった美甘大納言に比べ成熟期が早く、作りやすかったことから白小豆が選択されました。

その後、小面積ではありますが栽培は継続され、近年になり、生産調整達成が厳しくなってきたこと、古くからの産地であること、業者の白小豆の在庫が底をついたこと、実需者が良品の安定生産を切望していたこと、などを背景に、平成12年3月に組合数70名で久世町白小豆生産組合を設立し

ました。事務局はJA久世支店内にあり、町、農協、農業改良普及センター等の支援のもと、初年度は栽培面積9haで好成績をあげ、組合員及び栽培面積は翌13年には106名、14ha、翌14年には129名、20haにと年々拡大しています。これに合わせて、当初は昭和63年に大豆で導入した脱粒機で白小豆も脱穀していましたが、平成14年に農協事業主体で単県水田営農推進事業で脱粒機3台を導入しています。また手押しの播種機を平成12年に事業で3台、平成14年に生産組合で4台導入しています。

毎年作付前と栽培期間中に講習会を開催し、基本技術の徹底により10a単収は130kgから145kgと、白小豆としては比較的高位に安定しています。また、13年には最終

表2 久世町の白小豆の生産実績

	組合員	栽培面積	生産量	平均10 a 単収	1 kg 平均単価
平成12年	70名	9 ha	198俵	130kg	1,270円
平成13年	106名	14ha	311俵	133kg	1,200円
平成14年	129名	20ha	482俵	145kg	700円 (見込み)

需要者を視察し、製品を店頭で見て、毎年購入し味わうことにより、良い物を供給しなければと言う意識が高まっています。販売については地元の雑穀商に全量出荷しますが契約栽培ではないので、平成12、13年はますますの価格でしたが、平成14年産は生産量の大幅な増加により、12年産単価の半額近くになると考えられます。

### 3. 栽培技術

種子は品質を維持するため2年に1度程度は地元の雑穀商から購入します。作付は水田が中心です。水稲は早生品種のコシヒカリ、キヌヒカリが主体で5月中旬から6月上旬田植で、白小豆は隣接圃場に7月中下旬に播種します。連作を嫌う作物なので水稲との輪作で、排水は比較的良好な土壌ですが、圃場周囲の明渠等排水に力を入れ

ています。少しでも手選別を楽にするためシンクイムシ等の防除を徹底し、成熟した莢が8割程度になった株から順次手抜きで収穫し、架干し乾燥し、子実水分が15%になってからスレッシャーで脱粒します。その後ふるい等でゴミや被害粒、未熟粒を取り除いて出荷します。

### 4. 生産性

白小豆は米に比べて生産コストが低く、平均的な農家（水稲40a、白小豆20a）で水稲の収支がマイナスであるのに対し、白小豆は12、13年は転作奨励金を含め10a当たり9万円前後の収益がありました。しかし、14年産は出荷量の増加により価格が大幅に下がる見込みで、転作奨励金を含めて10a当たり収益は3万円程度になると考えられます。15年は転作奨励金がかかる見通しであ

表3 白小豆の収支（10a当たり、14年見込み）

項目	金額（円）	備考
収支		
販売代金	101,500	700円/kg×145kg
転作奨励金	23,000	
合計	124,500	
支出		
種苗費	3,000	
肥料費	9,500	
農薬費	6,000	
販売費	3,953	
賃借料	5,305	脱粒機、播種機
減価償却費	44,167	トラクター、軽トラ、管理機、動力散粉機、農機具庫
修繕費	17,200	
その他	4,000	
合計	93,125	
収益	31,375	

ることから、単価が14年並でも、収量の低い農家、品質の悪い農家は収支がマイナスになると思われます。

## 5. 今後の課題

14年初夏に久世町の白小豆を調査に来られた(社)食品需給研究センターの村上陽子さんも食品流通研究 No.5で書かれていますが白小豆は用途(需要)がごく限られているため、需要を上回る供給があると価格が暴落することは容易に察しがつきます。今収益性が高いからといって、むやみに生産拡大すると、供給過剰になりかねません。価格に左右されず今後とも実需者のニーズに合った質の高い物を継続して供給することが重要と思われます。

そのためには、白小豆生産組合を中心に、さらに収量・品質の向上とコストの削減に力を入れていく必要があると思われます。また、今まで多くの地域が価格の高い時期に急に面積を拡大しては価格の低下とともに

に衰退を繰り返してます。実需者のニーズに合った量と質の白小豆を継続的に供給していくためには、契約栽培も検討する必要があると思われます。

また、14年の転作作物の内訳を見ると小豆が30.5haで、転作面積の20%を占め、続いて野菜18%、飼料作物15%となっています。久世町にとって小豆は転作作物の柱になっていますが、転作達成、農地、機械を有効利用するためにも、赤小豆、大豆も合わせて今の面積の維持が必要と思われま

## 参考文献

岡山県農業試験場北部支場(水島)「有機物多投、新旧技術の駆使で多収-畑作輪転栽培・白小豆」1975年

食品需給研究センター(村上)中山間農業地域における雑豆類の生産-白小豆と黒大豆の事例-2002年